

富山発先端ライフサイエンス若手育成拠点 (実施期間：平成 22～26 年度)

実施機関：富山大学（総括責任者：遠藤 俊郎）

プロジェクトの概要

富山大学の重点研究拠点の一つである医薬理工融合の先端ライフサイエンス拠点を学長直属のテニュアトラック推進特区に指定し、国際公募で任期付きの助教を採用し、研究の国際性と進取性に富み、21 世紀のライフサイエンスをリードするとともに、その研究成果の産業への応用も重視する現代の高峰譲吉を育成する。テニュアトラック実施委員会を置き、若手育成支援策を強力に推進する。

(1) 評価結果

総合評価	目標達成度	国際公募・選考・業績評価	人材養成システム改革 (制度設計に基づく実施内容・実績)	人材養成システム改革 (制度設計に対するマネジメント)	実施期間終了後における取組	中間評価の反映
A	a	a	a	a	a	a

総合評価： A (所期の計画と同等の取組が行われている)

(2) 評価コメント

機関のもつ特長を生かし、「先端ライフサイエンス拠点」の形成を機関の戦略とする明確なビジョンのもとで、テニュアトラック制（以下、「TT 制」という）を活用して若手研究者を育成しようとする計画である。焦点が絞られた実施計画は若手研究者にも魅力があると同時に、機関内でも支持が拡がり、TT 制のあり方の一つの形を提示したものとして高く評価できる。国際公募において公平で透明性の高い審査によって7名のテニュアトラック若手研究者（以下、「TT 若手」という）を採用し、地域性も活かした養成環境の整備も行い、初年度に採用した5名の TT 若手(助教)のうち、4名はテニュア准教授として採用されており、制度設計から養成までの目標の達成度は高いと評価できる。プロジェクト終了後の TT 制の全学展開においても、学長の強いリーダーシップで、学内での TT 制への理解を高めるとともに、拠点そのものの継続と理工学研究部への独自の TT 制の展開も決定しており、自主財源の確保に努め、TT 制の全学への更なる普及を期待する。

- 目標達成度**：医薬理工連携の拠点形成として学長のもとにテニュアトラック推進特区を構築した結果、優秀な TT 若手の採用に成功するとともに、地域での創薬という特長を活かした産学連携、更にはグローバルな活動などによる十分な育成環境を整備した効果が現れている。中間評価やテニュア審査基準も、公平で透明性の高い体制が整備されている。年次・中間評価結果のフィードバックを図るとともに、英語による大学院の講義などを通じた教育力などの養成や、研究力を高めるための国際共同研究や地域研究会の主宰などの研究活動を通じて、TT 若手は高い業績をあげ、レベルの高い表彰を受けるなど、構築された養成システムが実を結んでいることは評価できる。プロジェクト終了後も、厳しい環境の中で、TT 制を全学展開する基盤が構築されており、更なる発展を期待する。

- ・ **国際公募・選考・業績評価**：特色ある分野でありながら広い領域を設定して公募し、20倍を超える応募者の中から、厳正で公平性・透明性の高い審査によって優秀なTT若手の採用に成功している。海外ポスドクの経験者が多く、特に海外から直接帰国して採用された者が半数以上を占め、高い倍率にも見られるように、多くの若手研究者から期待が寄せられる公募をしていることは評価できる。養成には、主(研究分野が近い)と副(異なる分野)の2人のメンターを配置し、進捗報告会やセミナーなどを通じて研究室のマネジメントを含めた助言・指導をする体制が効果を上げている。中間評価およびテニュア審査の評価手順と基準も詳細に準備して、被評価者にも前もって周知し、世界レベルの外国籍研究者を評価・審査に加えるなど透明性の高い評価・審査が行われたことは評価できる。
- ・ **制度設計に基づく実施内容・実績**：富山のもつ特徴を活かし、国際競争力のある独創的な研究を遂行できる若手研究者を養成するという明確な目標のもとにTT制の制度設計と普及を図っている。学長の主導のもと、育成機関として研究拠点が設置され、拠点内に養成を支援する組織と支援人材を配置するとともに、全学のテニュアトラック関連委員会との連携体制を構築し、TT制の定着に向けた取組みは評価できる。TT若手は高い業績をあげており、外部資金の獲得や著名な表彰を受けるとともに、得意分野での企業との共同研究を立ち上げるなど、育成環境の整備内容は評価できる。
- ・ **制度設計に対するマネジメント**：学長直属のテニュアトラック推進特区として、「創薬」の伝統を生かした重点研究拠点を設定し、医薬理工学融合で柔軟な切り口で事業を推進するという適切なマネジメントが生きた例といえる。産学連携事業、アウトリーチでも、特色ある活動が展開されている。学長主導のPDCAサイクルを活かしたマネジメントが着実に行われ、特に、学内アンケートを通じてTT制導入の学内理解を高めるとともに、組織再編や機能強化を検討する中で、TT制を活かした人事システムの構築を目指しており、今後の展開を期待する。
- ・ **実施期間終了後における取組**：TT制の全学展開が計画されており、拠点中心に国際的に活躍できる研究者の育成を目指す全学拠点型と、部局主体の特徴的活動を主軸とする部局型の2種類のTT制が進められている。全学展開に関するアンケートでは積極的な見解が多数であったが、今後、全学への定着を図る上で、既存の体制との調和を図り、拠点型と部局型の2つの制度の位置づけを明確にしつつ、組織再編などを行う中であって、本プロジェクトの成果を活かした新たな人事システムの展開に学長の強力なリーダーシップを期待する。
- ・ **中間評価の反映**：中間評価の指摘に対して、テニュア資格者の部局への配属、外国籍研究者を加えた審査方法、教育力向上などに関して、ほぼ適切に対応がなされている。先端ライフサイエンス拠点の継続も機関決定されており、今後の展開を期待する。